

事業連携大学：信州大学、富山大学、金沢大学

ENGINE版インターンシップ

ENGINE版インターンシップは富大生、信大生、金大生が一つのチームとなって課題に取り組む点が特徴です。異なる地域の学生同士がSNSやZOOMを駆使し、連携を取り合いながら活動を進めています。今号からは富山・長野・石川県の企業の協力のもと、ENGINEプログラムのキー概念である「創新・連携・突破」を体現している企業委人に対して取材をする高学年チームと、その高学年チームを取材する低学年チームの活動を紹介します。

10月からは、日本海ガス絆ホールディングス（富山市）、こみんぐる（金沢市）、ホテルブエナビスタを運営する東洋観光事業（松本市）等への取材がスタートしました。この過程では、取材内容の方向性についてアドバイザーである地方テレビ局からの助言を受けつつ、学生自身が企業に取材依頼を行っています。小田切優美さん（経3）は「私が所属している富山大学吹奏楽団の大会を前にしたレッスンと、ENGINE版インターンシップの時期がかぶってしまいました。はじめに想像していたよりもENGINE版インターンシップは課題が多くて少し大変ですが、チームのメンバーと

支え合って活動しています」と、課外活動との両立を図りながら課題に取り組む様子を語っています。

高学年チームの活動を取材する根津真奈実さん（工1）は、富大生6名一人一人に、インターンシップに参加した動機や、インターンシップを通じて伸ばしたい力について聞き取りを行い、映像に残す作業を行っています。根津さんは「高学年生は、1年生の自分とは意識の持ち方が違って、非常に感化されました」と言います。そして「高学年生の他者に伝えるテクニックを自分も身に着けていきたい」と意欲的に語ってくれました。

次号でも学生の活躍をお伝えしていきます。

コロナ対策として学生間の距離をあげ、撮影のタイミングのみマスクを外しています



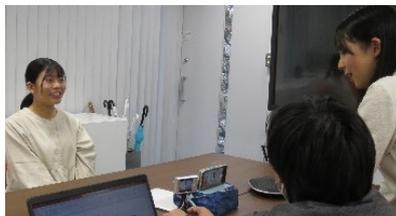
インターンシップと課外活動との両立を語る小田切優美さん（経3）



1年生からの取材を受ける市村朱音さん（経3）



日本海ガス絆ホールディングスの担当者と取材の打合せをする高木美優さん（経2）



<写真左>左から、宮崎友理さん（経2）を取材する吉本駿哉さん（経1）、根津真奈実さん（工1）、<写真右>取材を受ける杉下晟作さん（経2）



ENGINE科目「産業観光学」の紹介

11/8（月2限）のENGINE科目「産業観光学」では、本学理事で富山商工会議所の高木繁雄会頭を講師に迎え「富山県における産業観光の意義と将来展望」と題する講義を行いました。

高木会頭はまず、人口減少・高齢社会においては交流人口の拡大や地方創生に注力することが必要であり、そのためには今ある観光資源を再認識した上で「観光」から「産業観光」に目を向けるべきと指摘しました。特に、ものづくり県として発展してきた本県においても、高岡御車山祭や越中八尾のおわら風の盆等のユネスコ無形文化遺産や世界遺産といったものづくり以外の産業観光とのリンクを図ることが重要との見解を示されました。

学生からは「日本版DMOでは観光以外の産業との連携が必要ではないか」との意見や「新幹線の駅を持たない富山県内の市町村の課題は何か」との質問が出るなど、活発な意見交換がありました。



講義をする高木繁雄会頭

大しごとーくin信州 参加レポート

11/6（土）、信州大学（松本市）において長野県、富山県、石川県の企業と信州大、富山大、金沢大生をオンラインと対面で繋ぎ、互いに「働き方」について考えるキャリアイベント「大しごとーくin信州」が開催されました。当日、ENGINE版インターンシップ参加学生の高木美優さん（経2）が対面で参加しました。

高木さんは参加して良かった点として「社員さんと一対一で話せたこと」を挙げ「企業の大まかな内容を何うのではなく、社員さん個人の業務についての考えや感じていることをお聞きできました。全く知識のない分野でも『実は同僚に文系出身者が沢山いる』ということや『企業に入る前はこんなイメージだったけど、実際に働いたらこうだった』といったリアルな話をピンポイントで何うことができました。大しごとーくは自分の進路を改めて見直せる機会になりました」との感想を寄せています。

来年は本学でも「大しごとーくin富山」を開催予定です。



対面会場の様子

